

# シューメーカー靴の修繕や

●いまだ

まりこ

レンガどおりに、1軒の靴屋があります。

靴屋といっても、おじいさんの店は、移動用の店なので、季節に応じて、場所が変わります。

春には、桜の花びらが舞う陽だまり。

初夏には、ハナミズキやマゼンダ色のつつじが咲く、新緑の木陰。

梅雨には紫陽花に彩られたアーケードの下。

夏は、風通しのよい木陰。

秋には、日ごとに色を変える落葉樹の並木道。降り積もる落葉を掃き集め。

寒い冬には、街頭で、木枯らしが当たらないように、ついたてをして、ストーブを焚きます。

その上でお湯を沸かしたり、豆をぐつぐつ煮たり、甘酒や、おでん、そんなものを炊いていましたから、無駄というものがありませんでした。そこで、振舞ったりもしたものです。お茶を飲みながら、客は世間話をしてゆく。そんなことも、歳月がたち、次々と規則が作られ、でき難くなりました。

かつては、賑わいを見せた商店街も、車が当たり前になってからは、駐車場つきのショッピングモールにとって変わり、次第に廃れてゆきました。今ではもう、店をかまえた靴屋も珍しくなりました。多くは、デパートの片隅で店を営んでいます。

商店街は錆びれ、立ち止まる人も少なくなってきました。

それでも、きらびやかなデパートではなくて、おじいさんのところへ、わざわざやってくる人もいました。ひいきの客というものは、いるものです。

他の客から預かった仕事もたくさんあるようで、袋に入れて重なっています。道具箱、修理待ちの靴が、ずらりと並んでいます。

「みがいてや」

「なおしてや」

の一言で、ようやく、相手の顔を見上げます。めがねはずり落ち、上目遣いです。靴屋のおじいさん、真っ白なひげに、頭のとっぺんは、ピカピカ。丸いめがねが、大きな鼻にちょこんと乗っています。



店には、椅子が2つ。

小さな子供用の椅子と、古めかしい藤色の椅子。すめられたら、客は座ります。すすめられなくても、座る客もいます。

いつか、小さな椅子に、お尻の大きなおばさんが座って、大事になったこともありました。

おじいさんは、靴の修理で、ずっと下を向いています。

けれど、行き交う人の、足元だけは、いつも見えています。

さっそうと歩く人、どかどか歩く人。

ちよこまか歩く人。

とことこ歩く人。

スキップする人。

足を引きずりながら歩く人。

足が痛そうに歩く人。

合わない靴を履いているかもしれません。

こちらから店に呼び込みをするわけにもいきません。

その向こうに、ほんのわずか、生活が浮き彫りになります。見ようとかしているわけではなく、想像とではなく、ちらりと浮かぶのです。



店には、小さな椅子と、古めかしい椅子があります。  
あるとき、うっかり、おじりの大きなおばさんが、  
この小さな椅子に座って、大事になったこともありました。

通り過ぎる靴の種類もさまざまです。

ほっそりしたヒール。

くたびれたたて革靴。

穴の開いた運動靴。

ぴかぴかに磨かれた足もと。

ぞうり。

長靴。

ブーツ。

犬の足。

猫の足。

鳩の足。

そんな靴の修繕やは、必要とする人には見えるけれど、用のない人には、ただの街の風景の1つでした。

おじいさんの後ろには、客から預かった靴の袋がたくさん、重なっています。仕事を終えた靴は、いつでも受け取りに来れば、渡せるようになっていきます。

「あ、すみません、ありがとうございます。長いこと」

「いやいや」

受け取りに来れば、足に合わせ、確認後、持ち主に靴は返されました。

しかし、最近、せっかく修理に出したのに受け取り手のない靴が増えてきました。忙しくて受け取りにこれられない人も居るかも知れません。信用の問題ですから、おじいさんは、預かり続けてきました。しかし、その数は、次第に増えてゆき、電話番号を聞いていたものは、丁寧に1件ずつ連絡を入れました。中には、電話番号も使用されなくなっていたりで、悩みの種。或る日、とうとう、新聞広告を出しました。

「あおぞら靴屋より お知らせ

〇〇市 〇〇町の1丁目あたりに靴の修理を出された方

靴が迷子になっています

受け取りは 来年 3月まで

いちど 処分します

連絡は 〇×―〇△□× 番号まで若しくは、郵便で」

そんな広告が、時期をあけて、何度か載りました。

受け取り手の無い靴は、大切な靴ではなかったのでしょうか。或いは、なにか事情があるのでしょう。そう思い、また、預かり続けるのです。

使う人の居ない靴は、寂しそうです。

客のいないとき、おじいさんは、こつこつ靴を作りながら、行き交う人のことを考えます。

おじいさんの心のノートには、たくさんの人の人生が刻み込まれています。たいていの人は、いつも同じ時刻、同じ場所を通ります。

しかし、そのうち、顔が見えなくなった人もいました。

元気で歩いていた人が、しばらくぶりに出会えば、杖をつけています。

一人だったのが、二人連れになり、いつの間にか大きなおなか。そのうち、ちょまか小さな子供が歩いている。

初夏の陽射しがまぶしく、マゼンダ色のさつきが咲き、新緑があふれ返すころ。空は明るく水色、大勢の人が出かけます。

「こんにちは！」

よく靴を持ち込む若い女性です。片足にギプスが巻かれています。

おじいさんが、どうした？というように眉をあげると、

「バイクでさあ、事故っちゃったんだ。とうぶん、おじさんの直した靴がはけないな」

「まてまて、松葉杖、借り物か？下を直してやろう。ちよつと、難しかろう」

杖の底に、ゴム様の靴を履かせた。とても使いやすくなった。

「ありがとうございます。また来るね」

おじいさんは、仕事の手を休めず、手をふって、もう行けというように、手をふつた。

手を動かずおじいさんのそばで、ふらりとやってきては、一人で喋っていくのです。

これは、もう十年あまりにもなります。小学生の頃、父親の後ろに隠れていた。愛おしそくに靴を扱うおじいさんをみていると、何だかほのかに安らぎました。

そんな日、お下げ頭、スニーカーだった少女がいつの間にか美しい娘になり、べー



ジユのパンプスでやってきました。

晴れやかな顔です。

「お久しぶり」

おじいさんの記憶の扉が開き、幼いころの面影とぴたりと重なりました。

「いい靴じゃないか。きれいになったなあ」

「へへへ。ありがとう。はじめてのアルバイト代で買ったの。来年、就職するのよ」

「もうそんなになるかあ。母さんは元気か？」

「はい」

「早いもんだあ。ついこの前、中学生だったような気がするのになあ」

うれしそうに目を細め、椅子に座り、脱いだベージュのパンプスを手に取りました。

「ああ、かかどが、ずいぶんとくたびれとる。ここまですごくとなあ。こまめに手入

れしてやると、長く履けるんじゃない。」

「いつもそう思うのよね。おじさん、思い出して。来よう来ようと、気付いたら。こんなんだ。いつかは、ヒールごと取れて、捨てちゃった」

「こりゃ、痛かろう」

「そうなの。痛くて」

「捨てるんじゃないよ。こまでいくとなあ。ハイヒールやパンプスはこまめに手入れしてやると、長く履ける。大事にはいておやり」

親指の付け根が、赤くなっています。

「だいぶ、無理させたな。靴もおまえさんも。かっこいい靴に、足を合わせるんじゃないよ。足に靴を合わせるんじゃない」

そういいながら、おじさんはとんとんと、靴を直しました。

「はいてみる」

さつきより、ずいぶん楽です。

娘は、頬を染めて、

「いつも、ありがとう。なんだか、元気をもらうの。大切なプレゼントをもらった気分」

おじさんに直してもらうと、ずっと楽。女性は、修理を終えたパンプスを履くと、試すように、歩きます。

「ありがとう！ またね」

「おう」

笑顔で、さっそうと遠ざかりました。

おじいさんは、穏やかな微笑みを浮かべ、後ろ姿をしばらくながめ、見送り再び靴の修理に戻りました。

あの娘と最初に出会った頃が思い出されます。おじさんの方は、セーラー服やブレザー姿で、母親と連れ立って歩く姿を、何度か、見たことがありました。

町を途方に暮れ思いつめたように歩いていたのです。

ちやうど、かれこれももう3年ばかりになる。寒い冬の始まりの頃。

街角で、靴の修理をしながら、どこかしら気にかかる少女を、見守っていました。しばらく、そこでたたずんでいましたが、とうとう、しゃがみこんでしまいました。

「おじょうさん」



少女は顔をうつむいていました。

「おじょうさん」

「……私？」

うんうん、とお爺さんは、うなづきました。

「ここへきて、靴の修理をみてみないか」

「すみません、泣いていて」

「かまわんよ。なんか、辛い事があったんじゃないか」

「……」

少女は、泣きつかれた顔を上げて、傍へきました。

「座んなさい」

「お茶、飲むかい。昔はなあ、人通りも多かったが……」

おじいさんは、ストーブの上から、直接、カップに注いで、少女にお茶を渡しました。湯気のため、あたたかな透明な紅茶色です。

「あ、これ、ほうじ茶」

「ほお、ようく、わかったねえ」

「はい、懐かしい味です。」

「そうか。ちょうど、わしも一服の時間じゃから。どんなときも、お茶で一服、入れば、気持ちが変わるって言うもんサナア。今日は、学校は、お休みか」

「期末試験で、早く終わったんです」

「ああ、なるほど。学生が、さっきまで沢山いたなあ。もう、暮に近いが……」

「すみません。声を掛けていただいて」

「思いつめた顔しておられた」

「家を飛び出しちゃったんです」

「ほお、そうか。そういうこともあるう。二つに一つしか、ないように見えることもある」

「……。親に、反対されたんです。自分の進みたい道」

「進みたい道かあ、いいなあ。進みたい道が、かなり険しいんじゃないかなあ……親心は、時に言葉足らずでもあるしおう」

「……」

「進みたい道、それがおまえさんにとって本物であれば、きつと、道は開けるよ。じゃ

あ、思いが足らんで、諦めてしまうようなものなら、それは、本物じゃないという事じゃからなあ。まあ、2、3日、忘れて、棚上げしておくことじゃなあ」

「棚上げ？」

「そうそう。神様の棚におあずけじゃあ。2、3日といわず、1週間かのう。」

「おじさんは、どうして、靴屋さんのの？」

「それは、ひみつじゃ。1つだけ言うとなあ、どんな事があっても、ただ、続けられたからじゃなあ。本物というものは、そういうことじゃ。誰かがその価値を決めるんじゃないんじゃよ。親でもない。先生でもない。自分が選らんで、決めてゆく。それが、ほんものじゃ」

お茶は、すっかり、空になっていました。

「続けられること……」

「焦らんこと。道は、幾らでもあるんじゃからなあ」

「はい、何だか、ちょっと、ほっとしました。棚上げしてみます。わからないけれど、そうする事がいいような気がします」

「棚上げしっぱなしでもいいんじゃよ。それも、1つの選択じゃあ」

「ありがとうございます。お話を聞かせていただいて」

少女は、ペコリと頭を上げました。

「そこへおいていきなさい。気をつけて帰るんじゃよ」

「はい、さようなら」

少女の思いつめた顔は、和らいでいました。

それから、明るい顔、トキドキ悩んだ顔で、やってきました。

「いつも、ありがとうございます。これ、母と私から」

そういって手作りのクッキーや、エプロンなどが届きました。

赤い文字のパッチワーク入りです。胸当てには赤いハートまであります。

「かんしゃ、かんしゃ かんしゃ」

おじいさんの働く、そこだけ、暖かい感じがします。

ある日のこと、一人の中年男がやって来ました。

職人は、一瞬で見取、相手を傷つけない、適切だろうことばを選び、ことばを必要としているように見えるときは、会話をしました。

煙草をくわえ、せわしなくからだをゆするような男性。磨いてくれの一言で、静かに磨き始めました。

時計を見やり、体から染み出してくるような疲れが感じられた。

「少し、右に体が、傾いているね。腰や肩が辛いだろ？」

「うん、そうだが、何で？」

「急がんなら、ちよいと直す。2分だ」

男は、あごをさすりながら、感心した。

「やってくれ」

あつという間に、ふるいちびた、そこを取りはらい、不用なところを取り払い、必要な釘と靴底であつという間に修理しました。靴墨を塗る。

「はいてみる」

ほんの、わずかな時間。

男は、初めてあたりを見回して、今が、11月で、秋が終ろうとしていることに初めて気づいた。色づく街をゆっくりながめたこともなかった。目の前の、仕事に追われていた。

「うん、いいな。幾らだ？ 3000円？」

「からだを大切にしてくれな。」

男は、いつか、またこの町に来ることがあれば、ここへよろうと思いました。

また、或る日、声をかけてきたのは、どこからか流れてきたような、苛立った中年の男の声に老人は、まぶたを開いた。

「そこへお座り下さい」

老人の前には、ストーブがあり、その横には折りたたみ椅子がある。

中年の男は、突き出した腹と、鈍い光を放つブレスレットを光らせ、椅子にドカリと腰を下ろした。

よほど、苛ついているのか、眉間にしわを寄せ、しきりと携帯電話をしきりとさわわり、確認したり、探したりしています。靴はくたびれていました。

「寒いじゃろうから、ストーブに当たってください」

靴屋のおじいさんは、スリッパを差し出した。

「こちらを履いてください」

靴を脱がせると、一瞬、スリッパに差し込まれる前の靴下の上から、男の足を見て取った。骨太のくるぶし、毛の生えた下腿が色白く見えた。靴も匂いがする。冬に近いが、足の中は、さぞかし蒸れていたのだろう。おそらく、足の裏やかかとは、硬くなっていることだろう。

おもむろに、布を取り上げると、磨き始めた。靴は、外からは分からないが中敷もずれ始めている。男の指の形にやや変形している。

この男の暮らしてきた生活が、脱いだ靴からわかる。歩き回る生活。金ぴかを身にまとうが、全てが高価なものではない。足が無理をして安い靴を履いてきている。ブレスレットを買う金で、もっと自分の足にふさわしい靴を買うことだって出来たはず。無理した足は、痛みを伴うはず。

「お客さん、なかなか、よく歩かれていますね。磨くだけにしますか？それとも、左のちびたかかとを修理しましょうか？」

男は、煙草を吸い始めていたが、はっとしたように、歩きにくいことを思い出した。「お客さん、足が痛いじゃろうから、移動の時は、靴を脱いでおくのがよからうか、足の形がかわりかけとるなあ」

生活の為、仕事とはいえ、右の足が痛いので無理して左をかばっていることを気にしないように気にしないようにしていたことを思い当たる。

「うん、チョットね。直してもらおうか」

中年の男は、次の商談のことで忙しいのか、老人の靴やには、あまり関心を見向けない。携帯電話のメールを見たりしている。

老人は、淡々と、仕事をする。鋭利なナイフで、古びたかかとのテールをはずす。一瞬で、靴に合うテールの色と型を見て取り、一服する間に、テールに金具を打ち、糊を塗り、男の生活に合わせて、不要な部分を削り取る。次は一瞬で、男の足を見て、形を整える。仕事は速く、煙草を1本吸い終わらぬうちに、

「終わりました。はいてみてくださいください」

男は、煙草をもみ消し、立ち上がる。

靴やが男がはきやすいように靴を差し出す。

立ち上がり、靴を履くと男は、いつもより楽なことに気付いた。

「いかがですか？」

「うん……。何か違うね」

「そうですか？」

「何か、前より、買ったときより違う。楽なんだろうね」

「それは良かったです」

「幾らだい？」

「500円です」

「そんなでいいのか？ 靴も直したろう？」

「あなたの錯覚です。靴が、あなたに馴染んだんです」

そういうと老人は、伸びた髭の方へ向き直り、他の靴を修理し始めた。財布から500円取り出した。

そこで待つ間、男のところに不思議な声が聞こえた。

靴やは、何一つ、喋っていません。

『よい物を 欲しいと思えば 手に入れられるだろう

よい仕事をしようと思えば 手に入れられるだろう

けれど それは つかのまの まぼろし

こころを やすらかにすることも たいせつなこと

ひたすらな じかんもいいが

からだ たいせつになされ

かわりは いくらでもいる

しかし あんたしか できんこともある

そんな ひとに なりなされや

いまは あつというまにすぎる』

男の心には、こんな声が聞こえた気がした。

代金を渡し、中年の男は、前より軽やかに、なぜか体まで軽やかに歩み去った。

靴は、またその主人の足は、本人が語る以上のことを物語る。本人が知りたがらなければ、それは言うべきではないことを、人生を長く過ごした老人にはわかりすぎるほどわかっている。

沢山の人の人生を見てきた。自分の人生もままならぬのに。

注意や、アドバイスとして言われても、当の本人が受け入れずべを持たなければ、ただの雑音や戯言にしか過ぎない。自分は、ただ、ここで出会った靴の修理をする人間に過ぎない。どうしても場合を除いて。

一日、一日が積み重なり、季節は移ろい、冬が近づきました。

街は、盛り上げる音楽や呼び込みの音がして、にぎやかな歳末ムードです。

そんな中を、うつむき加減で歩く少年がいます。

薄いシャツに古めかしい大きすぎる上着を着ています。

見るたびに、靴の穴が大きくなっていきます。靴の中で、かじかんだ指が、丸まっています。おじいさんは、声をかけました。

「坊主、おいで。」

「え?」

「お前だよ。ちよっと、靴を見せてみる。直してやるよ」

「いやだ。金ないもん」

「いらんよ。暇な年寄りの相手してくれりゃいい」

少年は、ちよっと近づきました。

「これをはきなさい」

暖かなスリッパを上目遣いで示しました。

少年は、穴の開いた靴を脱いで、はだしのかじかんだ足を、そっとスリッパの中に入れました。ストーブのそばは、暖かです。

「おまえさん、本は好きか?」

「はい」

「じゃあ、図書館へ行くいい。あそこは、だれでも自由に本が読める。暖かいしなあ」  
少年は、じっと耳を澄ませていました。

「形のあるものは、いずれなくなるが、知識や知性は、誰にも盗まれん。じゃから、学ぶことは大切じゃ」

「ほら、なおった」

見事に、穴がふさがれ、しかも、同じ色で、外が補強されています。かかと辺りも、なんだか違います。

「ありがとうございます。ほく、今すぐに、お金が払えないんです」

少年は、憂いを帯びたまなざしで、正直に言いました。

「サービスじゃ。プレゼントじゃなあ」



「あの、お礼が出来ないんです。」

「その気持ちで十分じゃあ。世の中には、形のないものがたくさんある。むしろ、それが一番たいせつなものであることもあるんじゃないじゃあ」

おじいさんは、ふと遠い目をしました。

少年は、おじいさんに何か聞いてみたい気がしましたが、今はきけません。

「お前さんは、なかなか、利口な少年じゃ。勉強して、立派な人になるんじゃないよ。そして、お前さんが、いつか、誰かにお返しをしてあげればいい」

少年の心がすっと軽くなりました。

何もかも、上手くいくような気がしました。

とんとんとん、金の釘。

とんとん。銀の釘。

トントカ。かかとを打ち付けます。

夕暮れ近くに、流行のきれいな服を着た小さな男の子がやってきました。

おじいさんの前に、ちょこんと座って、靴の修理を見えています。

「おじいちゃん、頭も磨くの？ ピカピカ」

と無邪気に聞いてきます。

おじいさんは、上目つかいに、めがねをずりおとし、

「おう、磨くとも」

「おじいちゃん、サンタさんみたいだね」

おじいさんは、嬉しそうに、声を出して笑いました。

「そうかもな。昨日はクリスマスじゃった。一年で一番の大忙しの仕事も終わったしなあ」

男の子は、目を丸くしました。口まであいています。

「早く来なさい」

鮮やかな赤いコートを着た母親が、少しきつい声で言います。

「ママ、ほんもののサンタさんだよ」

「なに、馬鹿なこと言ってるの。いらっしやい。ただの靴磨きさんじゃないの」  
声は少し高くて、いらだっています。

ただの靴磨きやか。おじいさんはくすりと笑いました。



それはそれで、本当のことですが、今の時間を楽しんで生きていないときには、惨めな思いをしたこともありました。

「違うよ、サンタさんだってばあ」

「いらっしやい」

時々、振り向きながら、男の子は、手を振りました。おじいさんも、手を振りかえしました。

すっかり暮れた歳末の、あわたたしい街を、母親と手をつないで遠ざかりました。男の子の心には、夢がともっていました。

おじいさんは、とっぷり暮れた夕闇の中で、店を片付けました。

家に待つ人は、誰もいません。何年か前まではいたのですが、先に逝ってしまいました。

寂しいと思ったことはありません。心の中では、いつも語りかけているのです。

翌日は、お休みです。

おじいさんの休みの日の楽しみは、森の中でのんびりすることです。

大きなお気に入りの、木にもたれて、のんびりと過ごします。

時には、そうしていると、もうここで何百年も、何千年も過ごしているかのような気がするのです。

午後の日差しが柔らかく、暖かです。

色とりどりの落ち葉が、はらはら舞います。

うつらうつらしていると、突然、ムカデが、

『冬眠に遅れてしもうて、さむっ!』

ムカデは、たくさんの足を次々に動かして、

『くつ、くつがほしい。百足ちようだーい』

『ムカデのくつ?』

黒い、ちっちゃい革靴を、百足……。作るのもひと手間

かかるが。革となると重いから、やつは、一歩たりとも歩けんじゃろう。こりゃわらじだな。

おじいさんは、頭の中で、わらの代わりの絹糸がどのくらいいるか、計算していました。

その後、かまきりもやって来ました。

夏には、鮮やかなグリーンで、鎌を構えていたからだだが、枯葉色に染まっています。

『足が冷える。くつをくれんか』

足がひよろつと長くて、燕尾服のかまきり。似合うのは、ロングブーツ？ わはは。おかしいわい。

秋の深まるまで、せつせと働いていたアリたちも、おじいさんを見つけて、やっぱり、

『くつ、つくってちょーだーい』

と言いました。

ありんこに似合うのは、ながぐつ？ サンダル？

あの軽い体には、タンポポの綿毛でつむぐか……。

ううむ、困った。

思案していると、木の梢から、黄色と黒の、しましまの女郎蜘蛛までやってきました。

小さいけれどブリリアントカットされた宝石のようにランランと光る目。長い、まつげをぱちぱち。

『あたくし、あたくしにぴったりなの、くつがほしいのだけれど』

蜘蛛の足にくつ？ くつ？ くつ？？？？？？？

まあ、蜘蛛の巣に絡んだ小さな靴もかわいいが……。靴を履いて、どうやって、糸をつむぐんだろう……。

おじいさんは、あたまを抱えました。

そろそろ、冬眠のはずの蝶々までひよろひよろ、飛んできました。

『足が寒いよー。靴がほしいよお』

蝶が、靴を履いて、空を飛ぶ？

飛べるんだろうか？？？？？？？？？

だんごむしが、ころころころがりながら、

『くつ、くつ、くつ、くつ、ちょうだーい。流行の靴がいい』  
とやってきました。

『くつ、作ってくれないと、森から帰らせないんだから』  
小さいくせに、大きなだみ声で言います。

『お前さんたちが？ 帰らせんと？ たかが靴で？』

『たかがじゃないよ。だって、はやってるんだよ』

『ほおう。ううむ』

『はやってたら、脅してでもつくらせるのかのう』

『そうじゃないけど、くつがほしいんだ』

『ねえ、ねえ』

そのうち、ゴキブリも来るのではないでしょうか。

ごきぶりに靴？ 靴をはいたら……。

壁もあるけんだろうし。

案外、はかせると、いいかもなあ。害虫扱いじゃし。

延々と、虫たちが長い行列を作っています。靴を注文するための、行列です。

ずいぶん先まで続いている、終わりは見えません。てんとう虫や、ミツバチも。

それに、こおろぎやカメムシもいます。

おじいさんは、想像するだけでおかしくなって、クスクスから、とうとう、腹を抱えて笑い始めました。

目の前にいた、虫たちは、きよとんとしています。

『ああ、おかしい。笑いが止まらない。お、おまえさんらや、く、靴なんてはいてみる』

おじいさんは、立派な編み上げ靴を履いています。

『ぼくたち、おじいさんのような、素敵な靴がほしいんだ。憧れなんだ』

『ほお。ありがたや。じゃがなあ、靴を履くとなあ。困ったなあ』

おじいさんは、再び、笑い始めました。

『靴をはくとどうなるの？』

『靴をはいたらね、ありさんやあ、どうやって、花の上まで行くんだい？ どうやっておいしいものを巣に運ぶんだい？ 穴の中へ、誰も入れないよ。ごろごろ、ころがって落ちる。くつで、穴が埋まる。食べ物、集められんぞ』

『そうかア……』

想像しています。

『かまきりや、くつをはいたら、ぴよんとも飛べん。足が曲がらんじやろう。そして、地面を歩くか。地面じゃ踏みつけられる。鳥や蛙の獲物にされる。狩もできんぞ』



考えただけで、かまきりは蒼ざめました。

『むかでさんや、くつをはいてみる。くつで足がもつれて、そこから動けん。さぞ面白からうなあ。ああ、おかしい』

再び笑います。

『くもさん、くつはいたら、くもの糸が絡まって、自分が獲物になるなあ』

『じゃあ……どうしたらいいのかなあ』

みんなが、言いました。

『どうにもせんでもええ。お前さんらは、くつをはかんでも、立派な足があるじゃないか』

みんな自分の足元を見ています。

ひよろひよろの足。

黒光りする足。

かさこそ、けばけばの足。

もぞもぞ小さな足。

『みんな、その足には、りっぱな意味があるんじゃないよ。わしらみたいに、靴をはかんでも、痛かったり、生きていけんことはない。うらやましいなあ』

『ほんとう？』

『うん、うん』

おじいさんは、うなづきます。満面の笑顔です。

『そうかあ、いい足なんだあ』

虫たちは、改めて自分の足が誇らしくなりました。

『ありがとう、おじいさん。僕たち、とんでもないこと、するとところだった。よかったです。気づくことが出来て』

『おお、よかった、よかった。めでたし、めでたし』

おじいさんと虫たちは、楽しいひと時をすごしました。

目が覚めると、もう、夕方近くでした。

うそかまことか、面白い夢でした。

まさか、本当だったら、大変な仕事を引き受けたことになったなあ。

よい暇つぶしになったじゃろうが、やれやれじゃあ。

